

京都大学大学院文学研究科 21 世紀 COE プログラム
「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」

現代科学・技術・芸術と多元性の問題

PaSTA

Plurality and Science, Technology, Art

Newsletter

No.16 (2006/03/29)

本年度最後(第4通目)の PaSTA 研究会ニューズレター(第 16 号)をお届け致します。
今号では、所属大学院生・ODの海外派遣報告、および本年度活動状況のまとめを掲載致します。

海外派遣報告

今年の 2 月から 3 月にかけて、COE プログラム研究拠点形成費補助金により、PaSTA 所属の 4 名の大学院生・ODが海外出張を行いました。以下、各メンバーの用務の概要を報告致します。

1. 三宅 岳史(京都大学文学研究科・哲学専修 OD / 京都市立看護短期大学・非常勤講師)

渡航地： フランス(パリ)

期間： 2006 年 2 月 8 日 ~ 2 月 18 日

研究テーマ： フランス哲学、ベルクソン哲学と自然科学の関係

出張の目的・概要：

フランス国立図書館(Bibliothèque nationale de France, site F,-Mitterrand)にて、ベルクソンの引用文献、とくに日本国内では閲覧が不可能、あるいは困難なものを中心に複写・閲覧を行った(とりわけ 19 世紀末から 20 世紀初頭の自然科学の文献)。調査した文献を説明することで報告の概要に代えることにしたい。

・Désiré BERNARD, *De L'aphasie et De Ses Diverses Formes*, 1885, Paris.

Bergson, *Matière et Mémoire* でも何度か引用されているが、題の通り、失語症に関して様々な症例を扱っている。脳に関するブローカの局在論なども論じていて、『物質と記憶』が論拠とする科学的言説の一つであると思われる。

- ・Charles PUPIN, *Le Neurone et Les Hypothèses Histologiques Sur Son Mode De Fonctionnement*, 1896, Paris.
同じく『物質と記憶』で引用されており、ニューロンの研究史を実証的に追った生理学(史)の著作である。ベルクソンは神経系に独自の見解をもっているが、それが当時の生理学や病理学とどのような影響関係にあるのか、その一端を解明する文献として期待される。
- ・Pierre JANET, *L'État mental des Hystériques*, 1911, Paris.
- ・Archives de Neurologie, t. XXIV, 1982.
失語症をめぐる当時の医師 心理学者の見解について行われた討論が収録されている。
- ・Leonhart EULER, *Theoria Motus Corporum Solidorum seu Rigidorum*, (OPERA).
ベルクソンがその独自の空間論を述べる際に、『物質と記憶』第4章で引用。
- ・Joseph BOUSSINESQ, *Conciliation Du Véritable Déterminisme Mécanique Avec L'existence De La Vie et De La liberté Morale*, 1878, Paris.
決定論と自由の関係を論じた数理物理学者の著作。エレクトィスム(折衷派)の哲学者ポール・ジャンネの好意的なアカデミーへの報告が前文に載せられており、その哲学史的な位置付けや哲学的見解は、当時の哲学的状況を反映していると思われる。
- ・Louis ROULE, *L'embryologie générale*, 1893, Paris.
『創造的進化』第一章で引用。当時の発生学の研究が図版入りで載っており、これを見ると胚の発生など今日の高校の教科書などに載っている基本的な知識はこのころに形成されつつあったことが理解される。
- ・Alfred, GIARD, *Controverses Transformistes*, 1904, Paris.
Transformisme とは進化論のことであり、生物学者による当時の進化論争史、とりわけダーウィニズムと新ラマルク主義の対比が行われている。ベルクソンはこの著作を取り上げ、獲得形質の遺伝への賛成を留保し、当時の進化論の状況を見るのにも貴重な文献である。
- ・Félix Le DANTEC, *L'individualité et L'erreur individualiste*, 1898, Paris.
物理 化学決定論の立場から生命現象や遺伝などを説明。また同じくこの立場から新ラマルク主義に対する批判が述べられている。
- ・Herbert S. JENNINGS, *Contributions To The Study Of The Behavior Of Lower Organisms*, 1904, Washington.
同じく『創造的進化』第一章で引用される微生物学の文献。
- ・Élie METCHNIKOFF, *Études Sur La Nature Humaine*, 1917, Paris.
- ・J. DESAYMARD, *Bergson à Clermont-Ferrand*, 1910.
ベルクソンの生誕百年全集の『試論』の註で挙がっているベルクソンの伝記。
- ・*Éthique Et Épistémologie Autour Impostures Intellectuelles De Sokal Et Bricmont*, 2001, Paris.
『知の欺瞞』をめぐる行われたフランスの討論会の選集。BRENNER, Anastasios « Et si Sokal et Bricmont s'étaient trompés sur Bergson ? »では、ベルクソンと科学の関係に対するブリクモンの批判を考察している。

2. 杉本 舞(京都大学文学研究科・科学哲学科学史専修 博士後期課程)

渡航地： アメリカ(ボストン、ワシントン DC)

期間： 2006年2月26日～3月12日

研究テーマ： 1940年代アメリカの情報科学史

出張の目的・概要：

2006年2月26日から3月12日の15日間、20世紀中頃のアメリカにおける黎明期の情報科学・情報工学の歴史、特に「情報」「情報量」概念に関する歴史、及び「計算機」の設計と構造に関する抽象的理論の歴史研究のために、アメリカ合衆国、BostonのMIT Institute Archives & Special Collectionと、Washington DCのThe Library of

Congress において文献調査を行った。MIT Institute Archives & Special Collection には Norbert Wiener の手稿が 71Box, The Library of Congress には Claude Elwood Shannon の手稿が 21Box, John von Neumann の手稿が 34Box にわたり保管されている。Norbert Wiener は「サイバネティクス」を提唱した数学者, Claude Elwood Shannon は通信工学者で「情報理論」と「情報量」概念の創始者, John von Neumann は計算機に関する理論やオートマトン理論に貢献した応用数学者であり, 今回はこの三人について調査した。

手稿は, 大量の書簡, 未刊行の論文, 及び研究のアイデアを記したノートやメモランダムで構成されている。まず書簡については, 計算機設計プロジェクトのための意見交換, サイバネティクスに関する学際会議, また刊行された論文に関する質問とその回答についての書簡を確認することができた。また, Shannon, Wiener, Von Neumann 間の書簡のほか, 科学行政に携わっていた Vannevar Bush, Rockefeller 財団の Warren Weaver との連絡書簡, 書簡に添付された各研究プロジェクトの申請書なども閲覧した。今回の調査で入手した原稿やメモランダムのなかでは, 生物の神経系と論理回路のアナロジーに関する Shannon の未完成原稿, 計算機の設計について von Neumann が書簡に添付したレポートが, 特に興味深い。合計で約 40Box を調査し, 約 600 枚にわたる資料の複写を入手することができた。今後は資料を精読し, その内容について検討したい。

3. 枝村 祥平(京都大学文学研究科・哲学専修 OD)

渡航地： アメリカ(ロサンゼルス, サンディエゴ, ヒューストン, ボストン)

期間： 2006 年 3 月 3 日 ~ 3 月 15 日

研究テーマ： ライブニッツの哲学, 特に後期ライブニッツ哲学における物体の形而上学的基礎づけ

出張の目的・概要：

ライブニッツ研究で著名な Rutherford 教授がおられる University of California, San Diego (UCSD) で発表し, 加えてライブニッツ研究に関して業績をあげた先生方のおられる他の大学を訪問した。

今回の渡航の主目的は, UCSD での発表である。とはいえ, サンディエゴまでは直行便がないこともあり, University of California, Los Angeles (UCLA) を訪れるためにもロサンゼルスに滞在することになった。滞在初日・翌日は, 土・日曜日にあたり, 正規の講義やゼミはなかったが, ティーチングアシスタントたちと, 彼らに指導を仰ぎに来るジュニアないしシニア(学部3・4年生)とは何度も話す機会があった。月曜には, まず Barbara Herman 教授のカント主義倫理学に関する一般講義を聴講した。さらに Normore 教授と Parsons 教授のジョイントゼミナールに参加した。ピュリダンの論理学がテーマであった。

7日の午前, デカルトについての著作の準備でサバティカルを取られている John Carriero 教授に研究室にてお話をいただいた。教授が雑誌 *Studia Leibnitiana* に掲載された偶然的真理に関する論文について, 多くの質問をする機会に恵まれた。

8日は, UCSD にて Rutherford 教授のゼミに参加し, そこで渡米前に準備していた発表原稿を用いて発表した。表題は "Well-Foundedness and Reality in the Later Philosophy of Leibniz" であった。内容は大きく二つに分けられる。一節では, ライブニッツのテキストにおける「よく基礎付けられた現象 (well-founded phenomena, phaenomena bene fundata)」という語の曖昧さを確認した。二節では, モナドに基礎付けられているという意味での「よく基礎付けられた」現象がもつ実在性の程度を説明した。ゼミでは自由なディスカッションが時間の大部分を占めており, アメリカの大学の特徴を改めて認識することになった。また夕方には, カントやヴォルフの研究で知られる Watkins 教授主催の勉強会に参加し, ドイツ語のテキストを口頭で英訳するという初めての経験を味わった。9日には, 同じく UCSD にて心の哲学で著名な Paul Churchland 教授の一般講義を聴講した後, Brink 教授の倫理学ゼミに参加した。

11日には, ヒューストンにて Rice University の Kulstad 教授(北米ライブニッツ学会会長)と University of Houston の Gregory Brown 教授(同副会長)に同時にお会いする機会に恵まれた。両大学は合同セミナーを定期的に関わり、そこで使用される部屋にて両教授とお話することになったのである。両教授の論文について質問する機会

に恵まれたのは勿論、サンディエゴでの発表内容を紹介させていただくことも出来た。両教授からは何度も積極的に質問をいただき、私の研究内容に関連の深い論文についての貴重な情報も得ることが出来た。また、北米ライブニッツ学会に入る際には推薦人になる、と請合ってもらった。

13日には、Harvard University を訪問した。もうすでに日も暮れていたため Simmons 助教授とはあまりお話できなかったが、シンガポール出身で博士課程所属の Kweck 氏から Harvard の現状について話を聞くことができた。

概して、アメリカの大学は多くの国籍の学生によって占められ、活気に満ちている。古典に関する詳細にわたる知識は大学院生によってそれほど共有されていないように感じた。しかし、議論を数個のテーゼに分けて明確に構築しようとするスタンスや、常に自分の意見を積極的に発言する姿勢には大変感銘を受けた。最後になったが、私にこのような経験を与えてくれた PaSTA の企画に、そして派遣にあたり尽力して下さった出口先生に深く感謝したい。

4. 山本 圭一郎(京都大学文学研究科・倫理学専修 博士後期課程)

渡航地： イギリス(ロンドン、オックスフォード)

期間： 2006年3月7日～3月15日

研究テーマ： ジョン・スチュアート・ミルの倫理学

出張の目的・概要：

私は、これまで英国の思想家であるジョン・スチュアート・ミルの倫理学を中心に研究を行ってきた。PaSTA 海外派遣プログラムにより、本年3月7日から8日間の旅程で、英国において功利主義および J. S. ミル研究を行うことができた。

この海外派遣には二つの目的があった。第一の目的は、3月に University College London にて開催された Bentham Seminar への参加である。第二の目的は、オックスフォードの Somerville College にある Mill Library と、London School of Economics の Mill/Taylor Collection を利用し研究資料を収集することであった。ここでは、これら二つの目的について簡単に報告したい。

The International Society for Utilitarian Studies 主催による Bentham Seminar が、University College London にて開催された。このセミナーは、現在 UCL を中心として進められている Bentham Project の一環でもある。セミナーは3月の毎週水曜日に開催され、全部で四回ほどあったのだが、旅程の都合上、参加可能であったのは3月8日と15日の2回であった。3月8日のセミナーでは、Dr. Georgios Varouxakis (QMUL) による 'John Stuart Mill on International Relations' が発表された。彼は、若手ミル研究者として注目されつつあり、ミル生誕200年を記念して今年4月に開催される予定の、The John Stuart Mill Bicentennial Conference の主催者の一人でもある。Dr. Varouxakis の発表は、ミルにおける「愛国心」と「コスモポリタニズム」を考察するものであり、両者がミルにおいてどのように調整されていたのかを検討するものであった。3月15日のセミナーでは、Professor Frederick Rosen (UCL) による 'Methods of Reform: Mill on Bentham and Coleridge' を拝聴した。Rosen 教授は、2003年に公刊された *Classical Utilitarianism From Hume to Mill* に見られるように、今や英国における古典的功利主義研究の第一人者といっても過言ではないだろう。Rosen 教授の発表は、現在進行中である教授の研究の一部であり、ベンサムとコールリッジが、どの程度ミルの『論理学の一体系』における社会科学の方法論に影響を与えていたのかに関するものであった。どちらのセミナーでも、UCL にて Rosen 教授とともに Bentham Project の中心的な役割を担っている Philip Schofield 教授が司会を担当され、発表後、参加者全員によって活発な議論が行われた。このようなセミナーに参加することができたおかげで、古典的功利主義やミルの思想の理解をいっそう深めることが可能となった。

ロンドンにて開催された Bentham Seminar とは別の日に、ミルを中心とした研究資料の収集を行った。そのうち数日間は、オックスフォード大学に出向き、Somerville College にある Mill Library を利用した。同大学の Mill Library では、日本では入手不可能な研究資料が閲覧可能である。具体的には、ミル自身の手による書き込みがある自著や

書籍である。このようなミルの蔵書は、たとえば彼自身の著作ではあまり言及されていないヒュームの哲学に対し、彼がどのような読みを行っていたのかを理解する糸口となりうるものである。実際、ヒュームの『人間本性論』には、ミル自身による解釈のための書き込みがかなりあった。また、別の数日間は、London School of Economics の Mill/Taylor Collection を利用することができた。この Collection には、全 33 巻におよぶ『ミル著作集』(Collected Works of John Stuart Mill, Univ. of Toronto Pr., 1963-1991) に収録されていない、ミルの養子であった Helen Taylor などの書簡が収められている。どちらの図書館でも司書の方々は、私がこれらの貴重な資料を調べることを親切に助けてくれた。

今回の海外派遣ではいろいろな失敗もあったが、先生方をはじめ実にさまざまな方に助けられた。そのおかげで、有益なセミナーに参加でき、日本では入手不可能である貴重な研究資料を調べることも可能となった。今回の海外派遣で得られた知見をこれからの研究に十分に役立てたい。

本年度活動状況まとめ

第 23 回研究会

日時：2005 年 4 月 23 日(土)午後 2:00～5:00

場所：京都大学文学部 東館 4 階 COE 研究室

報告：ジェラルド・シブリアーニ 氏 (Dr. Gerald Cipriani)(京都大学大学院 文学研究科)

‘Creativity, Technology and Self-awakening toward the Other’

司会：出口 康夫 助教授(京都大学大学院 文学研究科)

第 24 回研究会

日時：2005 年 5 月 14 日(土)午後 2:00～5:00

場所：京都大学文学部 東館 4 階 COE 研究室

報告1：北島 雄一郎 氏(京都大学大学院 文学研究科 研修員)

「量子力学における質点について」

報告2：村上 祐子 氏(京都大学大学院 文学研究科 研修員)

「義務論理のパラドクス再考」

第 25 回研究会：‘On Denoting’ 100 周年記念ワークショップ

日時：2005 年 6 月 25 日(土)午後 2:00～6:30

場所：京都大学文学部 東館 4 階 COE 研究室

報告1：松阪 陽一 助教授(首都大学東京大学院 人文科学研究科)

「フレーゲの Sinn とラッセルの Denoting Function 記述理論の意義について」

報告2：久木田 水生 氏(京都大学大学院 文学研究科 OD)

「記述の理論とタイプ理論との関係について」

報告3：三浦 俊彦 教授(和洋女子大学 文学部)

「ラッセルの Noise Claim について」

報告4：戸田山 和久 教授(名古屋大学大学院 情報科学研究科)

「ミッシングリンクとしての置き換え理論」

司会：美濃 正 教授(大阪市立大学大学院 文学研究科)



松阪助教授

左から久木田氏、戸田山教授、美濃教授、三浦教授

第 26 回研究会：「視覚を通じた規範と指令」

日時：2005 年 7 月 21 日(木)午後 2:00～5:30

場所：京都大学文学部 東館 4 階 COE 研究室

趣旨説明：神崎 宣次 氏(京都大学大学院 文学研究科 COE 研究員)

「『視覚を通じた規範と指令』という問題設定について」

報告1：清水 寛之 教授(神戸学院大学 人文学部)

「視覚シンボルを用いたコミュニケーションシステムと規範・指令の問題」

報告2：亀井 伸孝 氏(関西学院大学 COE 専任研究員)

「手話言語における規範と指令」

司会：喜多 千草 助教授(関西大学 総合情報学部)

第 27 回研究会：「ケアについて 社会との関係と歴史的考察の試み」

日時：2005 年 9 月 17 日(土)午後 2:00～5:30

場所：京都大学文学部 東館 4 階 COE 研究室

報告1：天田 城介 助教授(熊本学園大学 社会福祉学部)

「社会のケア/ケアの社会 ケアはいかにして語ることが可能か？」

報告2：沢崎 壮宏 氏(大阪教育大学 非常勤講師)

「母性神話の終焉に見出されるケア倫理の可能性

エリザベト・バダンテール『付け足しの愛』における母性神話の終焉

報告3：竹中 利彦(京都市立看護短期大学 非常勤講師)

「ケアの倫理は誰が担うのか」

司会：三谷 尚澄 氏(京都大学大学院 文学研究科 COE 研究員)

第 28 回研究会：

京都生命倫理研究会、および科研費研究「応用倫理学各分野の基本的概念に関する規範倫理的及びメタ倫理学的研究」(代表:坂井昭宏 北海道大学教授)との共催

日時・会場：2005 年 9 月 24 日(土)午後 1:00～6:00

京都大学 百周年時計台記念館 第三会議室

2005年9月25日(日)午後1:00~5:00

京都大学文学部 新館 第一講義室

第一日

講演: 水野 俊誠 氏(東京大学大学院 医学研究科 助手)

「福利論」

ワークショップ: 「公衆衛生の倫理についてのワークショップ」

児玉 聡 氏(京都大学大学院 医学研究科 助手)

「公衆衛生の倫理学とは何か」

山本 圭一郎 氏(京都大学大学院)

「公衆衛生的介入と個人の自由 公衆衛生におけるパートナーリズムの検討から」

佐々木 拓 氏(日本学術振興会特別研究員・慶応大学)

「公衆衛生プログラムとしての遺伝子診断のもつ倫理的問題 自由と責任の観点から」

神崎 宣次 氏(京都大学大学院文学研究科 COE 研究員)

「公衆衛生の倫理における予防」

相澤 伸依 氏(京都大学大学院)

「公衆衛生の宣伝 普及活動における倫理的問題」

鶴田 尚美 氏(立命館大学 非常勤講師)

「国際的な公衆衛生研究における倫理的問題」

司会: 水谷 雅彦 助教授(京都大学大学院 文学研究科)

第二日

講演1: 安彦 一恵 教授(滋賀大学 教育学部)

「二重結果説のメタ倫理的考察」

講演2: 出口 康夫 助教授(京都大学大学院 文学研究科)

「臨床からの問い 無作為臨床治験の倫理と方法論」

司会: 水谷 雅彦 助教授(京都大学大学院 文学研究科)

第29回研究会:

Workshop "Modern Plural Aspects of Modal Logics: from a semantical point of view"

日時: 10月15日(土)午後2:00~6:00

場所: 京都大学文学部 東館4階 COE 研究室

報告1: 竹内 泉 氏(産業技術総合研究所 システム検証研究センター 研究員)

「様相論理とモデル検査」

報告2: 佐野 勝彦 氏(京都大学大学院 文学研究科 博士後期課程)

"Characterizations of the Elementary Modally Definable in Extended Modal Logics"

(joint work with SATO Kentaro)

報告3: Dr. Tadeusz Litak (Postdoctoral Fellow, JAIST)

"Discrete frames as semantics for modal and hybrid logic" (joint work with Balder ten Cate)

報告4: 加地 大介 教授(埼玉大学 教養学部)

「コプラとしての時制形態素」

司会: 村上 祐子 氏(京都大学大学院 文学研究科 研修員)

第30回研究会:

ジョン・マクダウェル教授講演会「知覚と概念」

日時: 2005年11月19日(土)午後1:00~4:00

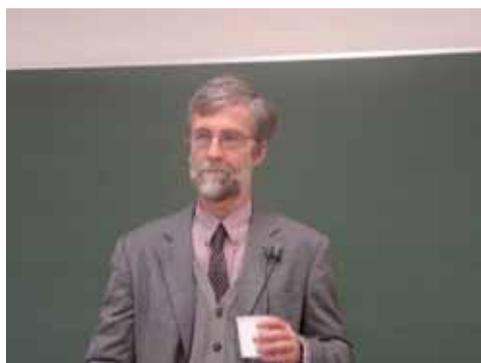
会場: 京都大学文学部 新館2階 第7講義室

講演: ジョン・マクダウェル教授

(Professor John McDowell, University of Pittsburgh)

"Conceptual Capacities in Perception"

司会: 伊藤 邦武 教授(京都大学大学院 文学研究科)



第31回研究会

日時: 2005年12月19日(月)午後2:00~5:00

場所: 京都大学文学部 東館4階 COE 研究室

報告: 巖佐 庸 教授(九州大学大学院 理学研究院生物科学部門)

「リーディングエイト: 間接互惠により高い協力レベルを維持できる社会規範について」

司会: 内井 惣七 教授(京都大学大学院 文学研究科)

第32回研究会:

ブルース・ジェニングス氏講演会「公衆衛生倫理と共同体」

日時: 2005年12月23日(金)午後2:00~5:00

会場: 京都大学 百周年時計台記念館 第三会議室

講演: ブルース・ジェニングス氏

(Mr. Bruce Jennings, The Hastings Center)

"Critical Terms in Public Health Ethics:

Public Health, the Common Good, and Civic Virtue"

司会: 水谷 雅彦 助教授(京都大学大学院文学研究科)



編集後記

4月より、担当研究員が長田から佐野勝彦に替わります。研究会に参加していただいた方々、とくに遠くからお越しになり発表して下さった方々に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

来年度は文学研究科COEプログラムの最終年度として、他研究班と合同し企画を進めていく予定です。今後とも変わらぬご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

長田 蔵人
[PaSTA 研究員]

PaSTA 事務局

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科
西洋近世哲学史研究室(担当:長田)

Phone: 075-753-2444

E-mail: pasta-hmn@bun.kyoto-u.ac.jp

Webpage: <http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/pasta/>